2004年 2 月

武道歌に見る居合術の理念と技術

小　林　勝　法

The Principles and Arts of Iaijutsu Showed in the Martial Arts Poems

Katsunori KOBAYASHI

Abstract

Iai-jutsu is the art of the sword that is to make a slash at the opponent at the same time as pulling a sword, and to kill with the one slash. It differs from Ken-jutsu in the point of confronting to the opponent with the sword put in the sheath. Iai-jutsu declined in the Meiji era, and entered the state of annihilation after the Pacific War though the sect of 200 or more generated in various places in Edo period. However, it revives now, and it is widespread to the whole country regardless of the age or sex.

The idea of martial arts and the instruction of the skills have been taught by oral, and come to be recorded by the character in Edo period. One of them is a martial arts song that is a kind of the Japanese poem.

180 martial arts songs transmitted to seven sects of Iai-jutsu were assumed to be material in this research. The idea of Iai-jutsu and the feature of the skills were clarified, and they are compared with those of Iai-do of the present age. As a result, it can be said that “Idea” and “Mental techniques”, “Physical techniques” are handed down by the martial arts songs. Additionally, there are a lot of “Martial arts spirit”, “Practice knowledge”, “Strategy”, “Arms method”.

And, about 26% of 180 songs were common in “In the sheath” (Win without fighting), “Presence of mind”, “Mind's eye”, and “Pulling out”, with Iai-do of the present age. However, many of technical terms of Iai-do such as “Keeping attention”, “Shaking off blood” and “Putting back the sword” do not appear in the martial arts songs of Iai-jutsu. Then, to examine when and how these technical terms have been formed was left as a problem in the future.

写真１（抜き付け）

Ⅰ．目　的

剣術は立ち合った者どうしが互いに鞘（さや）から刀を抜いてから斬り合う剣技である。一方、居合術はそれと異なり、刀を鞘に収めたままの状態で相手と向き合い、抜刀と同時に相手に斬りつけ、その一刀のもとに殺傷する剣技である。居合術は、「居相」や「座合」、「抜刀（術）」、「鞘離」、「鞘の内」などとも呼称されていることからも分かるように、「座位より始まる技もあること」「刀を抜く技法を重んじること」「変に応ずるということ」を技法的特徴としている[1)]。居合術の開祖は神夢想林崎流（しんむそうはやしざきりゅう）を興した林崎甚助重信（はやしざきじんすけしげのぶ）（1545年～没年不明）で、彼の弟子たちが分派し、無楽流や田宮流、新心流、長谷川英信流など200以上の流派が各地に発生した。明治時代に入り身分制度の廃止や廃刀令などにより衰退し、さらに太平洋戦争後はGHQ（連合軍最高司令部）による武道禁止政策により壊滅状態となったが、サンフランシスコ講和条約の締結以降、復興し、老若男女を問わず全国に普及している。平成15年４月１日現在、全日本剣道連盟居合道部に登録している有段者は７万人ほどであり、そのうちおよそ１割が女性である[2)]。現在では主に居合道と称し、日本刀（真剣もしくは模擬刀）を用い、座位や立位の型の稽古により、心身の修練を目指す武道となっている（以下、現代居合道という）。なお、戦後に全日本剣道連盟によって制定された型のほか、古くから伝わる伝統的な流派の型も共に修得する人がほとんどである。

さて、武術の理念と技術などの伝授は、口頭で伝える、いわゆる口伝（くでん）が中心であるが、近世になると伝書のように文字で記録され伝承されるようにもなってくる。それと同時に短歌や俳句などのような短い定型詩に詠み込んで伝えることもあり、そのような歌は武道歌と呼ばれている。流派ごとに歌だけをまとめた歌伝書もあれば、伝書の中に引用されているものもあり、合わせると数多くの歌が伝えられている。武道研究で大きな功績を残した今村嘉雄はおよそ7600首の武道歌を整理して、『武道歌撰集』（上巻・下巻）[3)]として刊行している。これにはほとんどの武術が網羅されており、居合術としては、７流派、合計180首が収められている。これらの武道歌に表されている居合術の理念と技術の特徴を明らかにし、現代居合道と比較検討することを本研究の目的とする。

Ⅱ．方　法

１．対象とした武道歌

『武道歌選集』に居合術として収められている流派と歌の数は表１の通りである。いわゆる歌伝書もあれば、伝書に引用されている歌もあるが、これらの180首を分析の対象とする。

表１．対象とした武道歌

流　派	流　祖	出　典	成立年	歌数
林崎流	林崎甚助重信	林崎流居合指南秘伝之書	1878(写本)	12
田宮流	田宮平兵衛重正	田宮流居合心和剣秘之巻	不明	20
林崎無楽流	長野無楽斎槿露	林崎無楽流居合指南歌	1661	32
山岸流	山岸市朗右衛門長定	山岸流居合歌之巻	1752	21
和新心流	関口八郎左衛門氏業	和新心流居合初学法用	不明	41
夢想流	上泉次郎義胤	夢想流居合口伝歌	1790	11
長谷川英信流	長谷川主税助英信	長谷川英信流居合心持引歌	不明	43

２．武道歌の主題の分類

これらの歌について、表されている主題ごとに表２に示す11項目に分類した。表２には項目の説明の他に該当例を示した。１つの歌が複数の主題を表している場合があるが、今回の分析においては、分類項目を１首について２項目までとした。例えば、「つよくしてゆき当たるをば下手といふ　まりに柳を上手とはいふ」（夢想流）という歌は和（やわら）の精神や技術を教える歌だが、身体的技術のみならず精神的技術でもあるので技法（ぎほう）と心法（しんぽう）の両方に区分した。

なお、歌を解釈し分類するに当たっては、出典である伝書も参照した[4)]。

表２．主題の分類項目

項　　目	説　明　と　該　当　例
技　　法	身体的技術に関すること ・立ちあひてながめことなる初秋の　紅葉重ねにしくものはなし（林崎流）
心　　法	精神的技術に関すること ・うつすとも月も思はずうつるとも　水も思はぬ広沢の池（田宮流）
武 器 法	刀などの武器の操法に関すること ・せばみにて勝を取るべき長がたな　みじかき刀利はうすきなりれ（夢想流）
戦　　術	複数人を相手にするなど戦術に関すること ・間を隔て敵が刀を抜くならば　あわてて抜くなさや口を切れ（林崎無楽流）
理　　念	居合の理念に関すること ・鞘口を放れぬ内は居合なり　抜き放れては兵法と知れ（和新心流）
武道精神	居合に限らず武道一般の精神に関すること ・おしなべてものを思はぬ人にさへ　こゝろをつぐる秋のはつ風（長谷川英信流）
修身自戒	修行生活を行っていく上での修身や自戒に関すること （該当例なし）
稽古心得	稽古をする上での心得に関すること ・師にとはでいかに大事を教ゆべし　こゝろをすまし念頃にとへ（山岸流）
作　　法	礼法や刀の扱いなどの作法に関すること （該当例なし）
教 授 法	居合の教授に関すること ・五つほどあらむ癖をば二つほど　ぬしにしらせずなほしぬかせよ（和新心流）
流　　派	流派に関すること （該当例なし）

３．分析の方法

⑴　主題の定量分析

主題の分類数の数量的特徴から、居合術全般の傾向を明らかにし、流派や時代による比較検討を行う。

⑵　現代居合道の要点との比較分析

現代居合道の要点として示されている術語や概念が居合術の武道歌にも出現するかどうかを明らかにし、武道歌に表されている理念・技術と現代居合道のそれとを比較検討する。現代居合道の要点は、昇級・昇段審査の時に学科試験で出題されたもの[5)]や試合の「審判要領」に規定されている勝敗の判定基準[6)]から抽出したもので、表３に示すように項目に分けて整理した。技法に関する述語が多いので、技法に関しては技を序盤・中盤・終盤の３局面に分けて整理した。

表３．現代居合道のおもな要点

技　　法	
⑴序盤	間合い、目付、姿勢、構え、鯉口の切り方、手の内、序破急、鞘離れ、抜き付け・切りつけ、脱力
⑵中盤	目付、姿勢、足捌き、切り下ろし、手の内、残心、脱力
⑶終盤	目付、姿勢、残心、血振り、納刀、鞘引き、脱力
心　　法	平常心（無心）、心眼、呼吸、気沈丹田
武　器　法	刀の部位の名称、手入れの仕方
戦　　術	複数の敵に対する目付
理　　念	気剣体一致、事理一致、鞘の内
武道精神	気位、
修身自戒	修練の心構え、日常の心構え
稽古心得	修行の目的、守破離、不断の稽古
作　　法	道場での作法、刀礼などの作法
教　授　法	指導上の心構え
流　　派	古流と制定居合との相違

Ⅲ．結　果

１．主題の全般的傾向

分類項目を多い順に示すと、表４に示すように「心法」（26.6%）、「武道精神」（21.1%）、「理念」（16.5%）、「稽古心得」（11.8%）、「技法」（11.4%）、「戦術」（6.3%）、「武器法」（5.9%）、「教授法」（0.4%）、であり、「修身自戒」と「作法」「流派」については該当例がなかった。

表４．主題の分類項目別歌数と比率

	林崎流		田宮流		林崎無楽流		山岸流		和新心流		夢想流		長谷川英信流		計	
技法	6	35.3	3	10.3	5	11.1	3	10.7	4	8.0	2	14.3	4	7.4	27	11.4
心法	4	23.5	13	44.8	14	31.1	5	17.9	13	26.0	7	50.0	7	13.0	63	26.6
武器法	0	0.0	6	20.7	2	4.4	1	3.6	0	0.0	3	21.4	2	3.7	14	5.9
戦術	0	0.0	1	3.4	5	11.1	2	7.1	4	8.0	0	0.0	3	5.6	15	6.3
理念	1	5.9	4	13.8	12	26.7	7	25.0	6	12.0	2	14.3	7	13.0	39	16.5
武道精神	6	35.3	2	6.9	4	8.9	4	14.3	7	14.0	0	0.0	27	50.0	50	21.1
修身自戒	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
稽古心得	0	0.0	0	0.0	3	6.7	6	21.4	15	30.0	0	0.0	4	7.4	28	11.8
作法	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
教授法	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	1	2.0	0	0.0	0	0.0	1	0.4
流派	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0	0	0.0
計	17	100.0	29	100.0	45	100.0	28	100.0	50	100.0	14	100.0	54	100.0	237	100.0
歌数	12		20		32		21		41		11		43		180	

「心法」の歌としては、無心の境地の重要性を教える「うつすとも月も思はずうつるとも　水も思はぬ広沢の池」（田宮流）や心眼の重要性を教える「浮き草をかきわけ見ればそこ（底）の月　爰（ここ）に

ありとはいかで知るべき」（林崎流、類似歌が夢想流と田宮流にあり）、「心とはいかなるものをいふやらん　墨絵に書きし松風の音」（田宮流、一休和尚の歌より）などがある。流派別に見ると長谷川英信流の13.0％から夢想流の50.0％とバラツキはあるもののどの流派においても出現している。

「武道精神」の歌としては、無用な争いや深追いの無益なことを教える「無用なる手詰の論をすべからず　無理な人には勝ちて利はなし」（長谷川英信流、山岸流）や神道との関わりを示す「立ちぬれば敵にふりゆく袈裟刀（けさがたな）　こゝろつく身を神のしらせで」（林崎流）などがある。流派別に見ると長谷川英信流が50.0％と最も多く、７流派の合計50首中27首を占めている。しかも、紫式部や一遍上人などの一流歌人の名歌や道歌からの引用が多く、武道精神そのものというよりそれにつながる心のあり方を示す歌が多い。一方、夢想流においては１首も出現していない。

「理念」の歌としては、居合術と剣術の相違を示す「鞘口を放れぬ内は居合なり　抜き放れては兵法と知れ」（和新心流）や孫子の兵法にいうところの「戦わずに勝つ」を示す「居合とは人にきられず人きらず　たゞたいらかにうけとめてかて」（夢想流、類似歌が林崎無楽流にあり）などがある。流派別に見ると林崎流の5.9％から林崎無楽流の26.7％までで、どの流派にも出現している。

「稽古心得」の歌としては、師範に教えを請う重要性を教える「師にとはでいかに大事を教ゆべし　こゝろをすまし念頃にとへ」（山岸流）や日々の稽古の繰り返しの重要性を教える「極意とて別にはなきぞ常によく　所作をからして理を吟味せよ」（和新心流）などがある。流派別に見ると、和新心流が30.0％と最も多く、７流派の合計28首中15首を占めている。一方、林崎流と田宮流、夢想流には出現していない。

「技法」の歌としては、柄（つか）の握り方、すなわち「手の内」の重要性を教える「立ちあひてながめことなる初秋の　紅葉重ねにしくものはなし」（林崎流、類似歌が田宮流にあり）や呼吸法の重要性を教える「表をば刀を早く身をつめて　いき合までもこめてぬくべし」（田宮流）などがある。流派別に見ると長谷川英信流の7.4％から林崎流の35.3％とどの流派にも出現している。

「戦術」の歌としては、敵の動作に応ずる方法について述べている「間を隔て敵が刀を抜くならば　あわてて抜くなさや口を切れ」（林崎無楽流）や「うごくとぞ見ればそのまゝ動くなり　うごかずと見ば動かざりけり」（田宮流）、臨機応変を示す「居合とは刀一つに定らず　敵の仕懸て留るやうあり」（山岸流、林崎無楽流）などがある。流派別に見ると、林崎流と夢想流には出現せず、最も多くて林崎無楽流の11.1％である。

「武器法」の歌としては、刀の長さの得失を示す「せばみにて勝を取るべき長がたな　みじかき刀利はうすきなり」（夢想流）や刀に対する思い入れを示す「ぬかば切れ抜かずば切るな此の刀　たゞ切る事に大事こそあれ」（田宮流ほか４流）などがある。流派別に見ると、林崎流と和新心流には出現せず、夢想流が最も多く21.4％である。

「教授法」の歌は１首のみで、それは本人に知らせないようにして癖を矯正させるという指導法を示す「五つほどあらむ癖をば二つほど　ぬしにしらせずなほしぬかせよ」（和新心流）である。

以上、見てきたように、「武道精神」（21.1％）と「稽古心得」（11.8％）は分類項目として高い比率を示しているものの一部の流派に偏っている。そこで、居合術全体の傾向としては「心法」（26.6％）、「理念」（16.5％）、「技法」（11.4％）が武道歌で伝承されている事項となろう。つまり、心身の技術と居合術の理念ということになる。

２．主題の流派や時代による比較

流派の特徴や時代による比較検討を試みたが、時代については出典の成立年が特定できないものも

あったので、比較検討ができなかった。そこで、ここでは明らかになった流派の特徴について述べる。

林崎流の歌数は12首で、「技法」「武道精神」「心法」「理念」のみである。歌数が少なく「技法」「心法」「理念」に集約されている。「武道精神」が多くなっているのは、技法や心法に関して抽象的に論じている歌が６首あるからである。それ以外の歌の主題については他の流派と大きな違いは見られない。

田宮流の歌数は20首で、「心法」「武道精神」「理念」「技法」「戦術」「武器法」に該当する。他の流派に比べると「心法」と「武器法」が多いのが特徴的である。そして、10首が他流などからの引用であり、丁寧にその典拠も示している。そして、これらには平常心の重要性を教える歌や刀に関するものが多い。しかも類似の内容のものも多いので、このことが比率を高めている。

林崎無楽流の歌数は32首で、「心法」「武道精神」「理念」「稽古心得」「技法」「戦術」「武器法」に該当し、比較的偏りが少ない。

山岸流の歌数は21首で、「心法」「武道精神」「理念」「稽古心得」「技法」「戦術」「武器法」に該当する。「稽古心得」が６首と多いのが特徴的である。

和新心流の歌数は41首で、「心法」「武道精神」「理念」「稽古心得」「技法」「戦術」「教授法」に該当する。「稽古心得」が15首と多いことと７流派のうち唯一「教授法」を含んでいることが特徴である。出典が『和新心流居合初学法用』で初心者向けの伝書であることから、「稽古心得」が多いのであろうと推察される。

夢想流の歌数は７流派中最も少ない11首で、「心法」「武道精神」「技法」「武器法」に該当する。「心法」が７首と殊に多い。そして、11首のうち５首が他流派にも出現する歌である。

長谷川英信流の歌数は７流派中最も多い43首で、「心法」「武道精神」「理念」「稽古心得」「技法」「戦術」「武器法」に該当する。上述したように「武道精神」が極めて多く、27首にのぼっている。しかも、紫式部や一遍上人などの一流歌人の名歌や道歌からの引用が多く、武道精神そのものというよりそれにつながる心のあり方を示す歌が多い。

３．現代居合道の要点との比較

現代居合道の要点として示されている術語や概念が居合術の武道歌にも出現するかどうかについて検討した。

⑴　術　語

まず、現代居合道の術語が武道歌にはほとんど出現していない。同意語まで含めて出現しているのは以下に示す３つの術語だけで合計４首であり、全体（180首）のうちの2.2%でしかない。そして、これらは「技法」と「心法」に相当するものである。

①鯉口（鞘口、さや口）の切り方

- 間を隔て敵が刀を抜くならば　あわてて抜くなさや口を切れ（林崎無楽流）
- 手を出さで只さや口を切るならば　敵のかまへに何か有るべき（林崎無楽流）

②手の内

- ぬかずともきれよ此の太刀ぬけてなほ　切れよ此の太刀はやき手の内（田宮流）

③呼吸（いき合い）

- 表をば刀を早く身をつめて　いき合までもこめてぬくべし（田宮流）

現代居合道で重視されている間合、目付、姿勢、構え、足捌き、残心、血振り、納刀などの術語は武道歌に出現しない。

⑵　術語の示す概念

術語そのものや同意語だけではなく、術語の示す概念と同じこと表している歌を抽出すると、以下の13つの概念で合計47首となる。これらは全体（180首）のうちの26.1％にあたり、「技法」と「心法」「理念」「稽古心得」に相当する。

①抜き付け・切りつけ（写真１参照）

・敵の太刀めぐまぬ先に鞘口を　ぬけて勝みは居合なりけり（和新心流）

・初太刀こそ神のをしへし袈裟刀　きるにはあらでかくるなりけり（林崎流）

②切り下ろし

・二つめは敵の右より袈裟かけて　まよいたる身を導くとしれ（林崎流）

③手の内

・立ちあひてながめことなる初秋の　紅葉重ねにしくものはなし（林崎流）

・青かへで秋の木末ぞ珍しき　紅葉がさねに嵐吹くなり（和新心流）

④目付

・行違に敵の足に目を付けよ　手はおのづから留るものなり（長谷川英信流）

⑤姿勢

・身のかねの位を深く習べし　とめねどとまる事はふしぎや（山岸流）

・身の曲尺（かね）の位を深く習ふべし　留めねどとまる事ぞふしぎや（長谷川英信流）

⑥足捌き

・行き列（つ）れや行き別れこそ大事なれ　刀よりまづ足の詰め引き（林崎流）

⑦間の取り方

・はやくなくおそくもあらじ重くなく　軽き事をばあしきとぞいふ（林崎無楽流）

・はやくなくおそくもあらじ軽くなく　重きことをばあしきとぞいふ（田宮流）

・身に付けて抜く習有る人はたゞ　組み付かぬ間に切れとこそ聞く（長谷川英信流）

⑧脱力

・つよみにてゆきあたるをば下手といふ　まりの柳を上手とはいふ（林崎無楽流）

・つよくしてゆき当たるをば下手といふ　まりに柳を上手とはいふ（無想流）

・つよみにて行き当たるをば下手といふ　まりの柳を上手とぞいふ（山岸流）

・強身（つよみ）にて行き当たるをば下手と知れ　まりに柳を上手とぞいふ（長谷川英信流）

・剛強の力たのみは恨めしき　青柳よりも雪折れの松（和新心流）

⑨平常心（無心）

・寒夜にて霜をきくべき心こそ　敵にあふての大事なりけれ（無想流）

・寒き夜に霜をきくべき心こそ　てきにあひての勝はとるなり（山岸流）

・行連て闇路をいそぐ時だにも　闇夜に霜を聞く心せよ（林崎無楽流）

・うつすとも月も思はずうつるとも　水も思はぬ広沢の池（田宮流）

・やどすとも水は思はずやどるとも　月も思はぬさる沢の池（田宮流）

・雷の上にふり敷く雷の音を聞く　やみに声なきからす鳴くなり（田宮流）

・雷の上にまたふる雷の音を聞く　やみにからすを見んとしづまれ（田宮流）

・朝あらし身にはしみけり松風の　目には見えねど音ぞすゞしき（田宮流）

⑩心眼（しんがん）

・浮き草をかきわけ見ればそこの月　爰にありとはいかで知るべき（林崎流）

・浮き草をかきわけ見れば底の月　爰にありとはいかでしるべき（無想流）
・浮き草をかきわけ見ればそこの月　こゝに有りとはいかで知るべき（田宮流）
・かく見ればそこまでうつる水の月　爰に有りとはいかで知るべき（田宮流）
・うき草を払ひて見れば水の月　底にありとは誰かしらまし（和新心流）
・心とはいかなるものをいふやらん　墨絵に書きし松風の音（田宮流）
・有明の水にうつろふ影見れば　底のこゝろはしられざらまし（和新心流）

⑪鞘の内

・居合とは人にきられず人きらず　たゞうけとめてひらがちにせよ（林崎無楽流）
・居合とは人にきられず人きらず　たゞたいらかにうけとめてかて（無想流）
・鞘口を放れぬ内は居合なり　抜き放れては兵法と知れ（和新心流）
・鞘口をはなれぬうちに勝ぞあり　不意を打つこそ居合なるべし（和新心流）
・口伝せよぬけぬうちにぞ勝ちは有り　ぬけはなたれては猶も勝あり（和新心流）

⑫抜刀精神

・居合とは心をしづめ出すかたな　ぬくればやがて勝をとるなり（林崎無楽流）
・居合とは心をしづめて出刀　ぬくればやがて勝をとるなり（山岸流）

⑬稽古心得

・師匠にも問はずばいかでをしゆべき　こゝろをつくしとふは礼なり（和新心流）
・帆をあげていそぐ船にはあらねども　水行く鳥の心しるべし（和新心流）
・帆を掛けて急ぐ小舟に乗らずとも　行く水鳥のこゝろしるべし（長谷川英信流）
・常はたゞ仕合と思ひ稽古せよ　不意を打つともうたれざらまし（和新心流）
・めのまへのまつげの秘事をしらずして　兎や角せんといちご気づかふ（林崎無楽流）
・目の前のまつげの秘事をしりぬれば　こゝ一ぢじ明らかの道（林崎無楽流）
・目の前のまつげのひじを知らずして　とやせんかくと一期きづかふ（山岸流）
・目の前のまつげのひじを知りぬれば　唯一すぢにすみやかの道（山岸流）

以上、見てきたように居合術と現代居合道に共通してみられるのは、「技法」と「心法」「理念」「稽古心得」に相当するもので、全体の26.1％にあたる。そして、現代居合道で重視されている「作法」や「武器法」（刀の部位の名称や手入れの仕方など）については皆無であった。

また、現代居合道では居合術に見られない「技法」に関する述語が多い。特に、残心や血振り、納刀などの終盤の要点が多いが、これらは居合術にはみられなかった。これは現代居合道では技法の教習内容がより詳細になり、術語の多くが近代以降に成立したからだと推察される。

「作法」や「武器法」についても、江戸時代の武士にとっては習慣や常識となっていることを近代以降では改めて修得しなければならなくなったことから、現代居合道では教習内容として重視されているのだと思われる。

写真２（血振り）

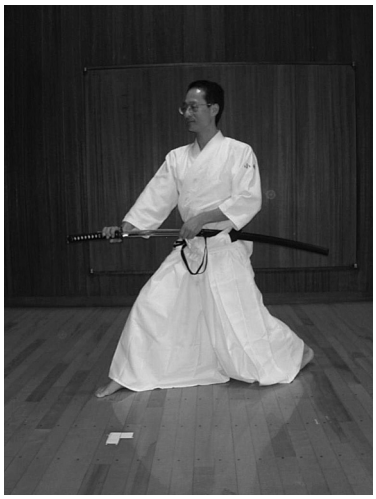

写真３（納刀）

Ⅳ．まとめ

７流派、合計180首の武道歌を分類し分析した結果、居合術全体の傾向として「理念」と「心法」、「技法」が武道歌で伝承されている事項と言える。つまり、居合術の理念と心身の技術である。

そのほかには、「武道精神」や「稽古心得」なども多く、「戦術」や「武器法」も見られる。

そして、全体の26％ほどの歌が、「鞘の内」（戦わずに勝つ）や「平常心」、「心眼」、「抜き付け」など現代居合道と共通していた。

しかし、「残心」や、「血振り」、「納刀」など現代居合道の術語の多くが居合術の武道歌には現れていない。そこで、これらの術語がいつ頃どのようにして形成したかその過程について検討することを今後の課題としたい。

また、剣術と比較することにより、居合術の理念と技術の特徴を一層際立たせることができる。今村の『武道歌撰集』には剣術の武道歌が1396首収められているので、いずれこれらの分析にも挑みたい。

（付　記）

本研究は、文教大学国際学部共同研究費（2002年度）の助成を受けた「教育方法論としての修行の研究」（研究代表者：高師昭南）の一環として行ったものである。

文献および注

１）和田哲也、「居合の思想に関する一考察」、『武道学研究』第17巻第１号、1985、pp. 100-101
２）筆者が全日本剣道連盟に問い合わせた回答による。
３）今村嘉雄、『武道歌撰集』（上巻・下巻）、第一書房、1989
４）『林崎流居合指南秘伝之書』、『田宮流居合心和剣秘之巻　全』、『和新心流居合初学法用』、以上、

いずれも『日本武道大系』第 3 巻（今村嘉雄ほか（編）、同朋舎、1982年）所収
5)「剣道時代」編集部、『詳解・全日本剣道連盟居合』、体育とスポーツ出版社、1995、pp. 202-203
6)「剣道時代」編集部、『居合道必携』、体育とスポーツ出版社、1996、pp. 194-196